

---

# 茨城県大洗町のインドネシア人

## — 日系三世と「研修生」のケーススタディ —

キーワード：日系人、移民、インドネシア、北部スラウェシ州、大洗町

内海 敦子\*

### 概 要

日本に働きに来る外国籍の人々は増加し続けている。本稿は大洗町に在住して働いているインドネシア人に質的な聞き取り調査を行った結果をまとめたものである。大洗町のインドネシア人のほとんどはスラウェシ島の北部スラウェシ州の出身者で占められている。1985年ごろからこの地域の出身者が大洗に来て働くようになり、インドネシア人コミュニティが徐々に形成された。彼らが2018年現在、どのようなきっかけや経緯で大洗にやってきてどのような生活しているのかを技能実習生と日系人とその家族から質的な聞き取り調査を行った結果を記した<sup>1)</sup>。

### 1. 大洗町とインドネシア人労働者

日本では1990年の「出入国管理及び難民認定法」の改正以降、単純労働において日系人を中心とした外国人労働者の受け入れが限定的に進められてきた（厚生労働省、2002）。日系人人口は年々増加したが2008年以降のリーマンショックと2011年の東日本大震災を機に減少に転じた（法務省在留外国人統計）。2010年には労働法の適用を受ける在留資格「技能実習」が新設され、第一次産業における外国人技能実習生が増加し、日系人が技能実習生におきかわる傾向がある。

大洗町は1949年に磯浜町と大貫町が合併してできた自治体で、水戸市からは10キロ強離れており、面積は23.19 km<sup>2</sup>である。磯浜地域は漁船の出入りが比較的容易であるという地理的条件を備えており、沿岸漁業が盛んであることと関連して、多くの水産加工会社が存在する。以前は近海漁業により収穫されたイワシ、サバ、サンマの塩干や煮干の加工が目立っていたが、1965年以降輸入原魚を用いた加工が盛んになり、パートの主婦を雇用し水産加工品を市場に出すようになった（目黒 2005）。一方、高学歴志向やホワイトカラーの職種への志向、人口減少や高齢化に伴い、水産加工業における労働力不足が目立ってきたため、外国人労働者の雇用を進めることになる（目黒 同上）。大洗町によると、2018年6月時点の世帯数は7512、人口は17033人となっている。2004年1月には19623人の人口があったことから、人口減少が続いていることが分かる。代わりに1980年代から徐々に外国人が増え始め、2004年1月の外国人居住者は904人であった（目黒 同上）ことから、この時点での外国人の割合は4.6%となる。2010年の外国人比率は約4.2%である。2011年の東日本大震災がき

---

\* 日本文化学科 准教授 言語学

っかけで帰国した外国人も多いが、現在でも同様の割合で外国人が滞在しているとみられる。

2004年11月のデータによると大洗町に居住する外国人のうちインドネシア人は最多で411人、次いで中国人133人、フィリピン人132人、タイ人57人、ブラジル人33人となり、大洗に居住するインドネシア人はこの時点で自治体の中で最多であった（目黒 同上）。

中国国籍のものも主に技能実習生として来日し、その数は2003年から急激に増加、2008年には357人となった。この時点で346人のインドネシア人を抜き最多となったが、2011年の東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故をきっかけに中国国籍の人々は大量に帰国して2014年には138人まで減少した。インドネシア国籍の人々の中にもこれをきっかけに帰国した者はいたが、大幅な減少はなく、300人前後で推移し、2014年時点で最多となっている（金・栗林・川口・包・池田・山下 2016）。

フィリピン人とタイ人に関しては、日本国内に強固な売春斡旋ネットワークがあることが確認されているが（井口 2001）、大洗町においても女性の一部が風俗産業に従事している（目黒 2005）。また、水産加工会社においても反社会的集団の関与がある違法ブローカーが仲介してフィリピン人、タイ人の雇用が行われることがあったが、高額な仲介金要求などの問題が生じたため、これらの人々の雇用が長続きしなかった（目黒 同上）。

不法就労者としてのインドネシア人は、上記とは異なり、1985年ごろに日本人船員と結婚したある北スラウェシ州ビトゥン（Bitung）出身のインドネシア人女性が違法ブローカーとして活躍し、自分の親族や知人を呼び寄せて大洗町の企業に不法就労者を派遣していたという。その後、1998年になると茨城県警察および東京出入国管理局が定期的は大洗町の水産加工会社を査察し、不法就労を摘発したため、不法就労者は国籍を問わず大洗町から去っていった。このため、1990年代前半から南米の日系人（特にブラジル人）の雇用が始まったが、適法性の高い業務請負会社経由での就労であるため、手数料が高く、1998年より合法的な長期就労が可能な日系インドネシア人が流入するようになった（目黒 同上）。これらの人々は水産加工工業に従事することが多く、同郷人が同じ職場にいることが多い。そしてキリスト教会を中心としたコミュニティが形成されていることで定住化が進んでいる。

目黒 2005 は、以下のように日系インドネシア人雇用の経緯を述べている。

日系人としてのインドネシア人の本格的な増加が始まったのは、ある水産加工会社の関係者であるA氏が、北スラウェシ州、特にメナド（マナド）<sup>2)</sup>に日本人の祖先をもつインドネシア人が多く居住するという情報を得たことによる。A氏はたびたび入管の摘発を受けて人材確保に悩んでいた各企業の要請に応じ、メナド在住の日系人を各企業に紹介することで、大洗町の水産加工工業における雇用の合法化を試みた。1998年以降2005年まで、A氏は北スラウェシ出身の日系人約180人を、大洗町の企業20社に紹介している。A氏は、手数料を取る請負業務ではなく、あくまで紹介という形で各企業に日系インドネシア人の就労を斡旋した。

上記の記述に出てくるA氏は、おそらく金他 2016 でもA氏として登場する人物と同一であると考えられる。金他 2016 では「大洗町内で水産加工会社を経営」しており、「1992年頃、インドネシアのジャワ島のスマラン、ジョグジャカルタなどに滞在し、スラウェシ島

北部のマナドに、家業であるチリメンジャコの原材料の検品工場を設立した」ということである。その後、マナド近辺に日系インドネシア人が多数居住していることを知り、大洗町長から日系人の紹介を依頼されていたことから受け入れのために活動することになったという。「A氏は日本において系譜調査と査証申請を行うほか、就労予定先との日程調整や大洗町内での新生活の準備など受け入れ業務を担当した」（金他 2016）とあるが、このA氏は筆者の筆者が聞き取り調査をした中で頻出したS氏の活動内容そのままであり、同一人物だと考えられる。インタビュー全般からは、この人物は金銭的な動機ではなく、日系インドネシア人と水産加工会社両方の利益のために活動しているように窺われるが、目黒 2005 においても「A氏は現地での諸手続きや、出生認知のためのインタビュー、系図作成なども行った。A氏はその費用を借金として彼らに負担させ、その代わり紹介料や仲介料はとらないこととした」という記述があり、一致している。

インドネシアでは戦後一貫して人口が増加し続けており、特にジャワ島の人口密度は高く、よりよい労働機会を求めて国内移民がさかんであり（1960年代から一時期においては政府の方針でもあった）、海外への出稼ぎも多かった。初期は旧宗主国のオランダ、1970年代からは中東の産油国、シンガポール、インドネシアよりも経済発展の著しいマレーシアへの出稼ぎがブームとなっている（目黒 2005）。ムスリムが多数をしめるインドネシアでは、同じスンナ派イスラームの中東の国々への出稼ぎは、資金をためたあとに巡礼に行きやすいことなどから人気があった。しかし、北スラウェシ州はオランダ支配の影響が大変に強く、元々の住民はほとんどがキリスト教プロテスタントであり、少数がカトリック、さらに少数がイスラーム教徒である。現在、北スラウェシ州の州都であるマナドは他地域からのイスラーム教徒が多く流入し約半数を占めるに至っているが、大洗に来ている技能実習生や日系インドネシア人はほぼ全員がキリスト教徒である。これらの人々にとっては中東へ出稼ぎは宗教の違いなどからあまり気の進むものではない。一方、日本、台湾、韓国などの東アジアの国々は相対的に宗教色が薄く、食材の限定がないキリスト教徒にとっては過ごしやすい環境である。初期の大洗の不法就労者も宗教上の理由もあって中東よりは日本に来るほうがたやすかったのではないだろうか。

## 2. 「ケンシューサー」と「ニッカー」

大洗にいるインドネシア人に尋ねると、自らを「ケンシューサー」あるいは「ニッカー」と答えるケースが多い。ただし、以下の理由から「ケンシューサー」は法的には「技能実習生」と考えられる。

「研修ビザ」の在留期間は6か月または1年となっている。研修総時間の3分の1以上の時間をOJT（On the Job Training）以外の座学に当てる必要がある。また、就労者ではないので賃金を受け取ることはできない。研修時間は1週間に40時間以内で、時間外や休日の研修は認められていない。

公益財団法人国際研修協力機構のホームページによると、外国人技能実習制度のもとでは入国一年目に「技能実習第1号」の在留資格のもと「技能などを修得」し、2、3年目に「技能実習第2号」の在留資格のもと「技能などに習熟」することになっている。

「技能実習」ビザは最長3年の滞在が可能である。初期講習の後、実習計画の範囲内で実務実習を行うことが可能である。初期講習の後には労働関係法令が適用されて実習を行うことになり、最低賃金を下回ることは許されない。

大洗のインドネシア人に尋ねると最長三年間の滞在中で働きにくる人々について「ケンシューセイ」という用語で言及しており、「ジッシューセイ」という単語はあまり通じなかったが、労働実態と賃金発生状況を見ると「技能実習制度」の基で勤務していることが確実である。これらの技能実習生は、大洗町の水産加工会社が日本側の受け入れ団体に対して技能実習生の紹介を依頼、インドネシアの送り出し団体と連携して人材を選定して派遣する形になっている（金他 2016）。

「ニッケー」のインドネシア人の来日経緯は第一節で述べた通りである。以下の3節では、日系インドネシア人の祖父たちがインドネシアで子孫を残した経緯を述べる。

### 3. 北部スラウェシに行った日本人—日系インドネシア人の祖父達

日系インドネシア人は、どのような経緯でインドネシアに来た日本人の子孫なのであろうか。第二次世界大戦時における日本の南進政策のもと、従軍した日本人のうち、約1000人が残留し、オランダに対する独立戦争に参戦した（上坂 1997、林 2007）。そのうち324名が生き残りインドネシアに残留した。坂井 2009はその子孫は2世代で約1700名、3世代で5100名くらいではないかと推測する。その他、留学生などのインドネシア人男性と結婚した日本人女性の子孫の2世が2000人程度、3世が若干加わる。これらの日本人の血を引く者は2世と3世を合わせて9000人くらい、配偶者や家族を加えて1万6000人、本稿で取り扱う北部スラウェシの日本人の子孫などとその姻族を加えて2万人程度と考えられる（坂井 同上）。日系インドネシア人は多くが軍人としてインドネシアに来た男性の血を引いているが、北部スラウェシの日系インドネシア人には軍人ではなく、民間人の血を引く者が多い。

かつお節は17世紀後半に発明され、江戸後期に日本に広まり、明治時代以降にかつお節産業の振興が政策的に行われた。第一次世界大戦後、国際連盟の「委任統治領」として日本の植民地となり「南洋群島」とよばれたミクロネシア、北ボルネオ、北スラウェシでかつお節生産が行われるようになり、昭和10年代においてもっとも多くかつお節を生産していた地域は「南洋群島」であった（藤林・宮内 2004）。

インドネシア人に日本人が渡り始めたのは1890年代である。最初は沖縄の糸満漁民が追込網という大量漁法を用いて東南アジア海域、その後は南太平洋に進出していった。インドネシアにおいては、北部スラウェシ州やカリマンタン島の東部などに多くの日本人が漁民として移住していった。1939年の調査によるとマナドの日本人小学生19人のうち15人がミナハサ族（北部スラウェシ州の本土部分に居住する民族）の母親をもっていたし、1940年の調査によると北スラウェシ州ビトゥンに154人の日本人が滞在していた（藤林・宮内 同上）。1941年以降は、軍事戦略にとりこまれ、軍属として徴用されるものも増加、軍人として日本から新たに来るものも増えた。

インドネシア東部海域（マナド、ビトゥン、ハルマヘラ、マルクのあたり）で漁業を最初

に試みた日本人としては1910年に引き網で小型のカツオ漁を行った長崎県の栗本という人物が記録されている。その後、鹿児島出身の原耕という人物が南洋調査を開始し、北スラウェシのケマ（Kema）でカツオを大量に釣り上げ、この海域の可能性を日本に知らしめることになった。1929年ごろにはマナドで金城漁業協同組合とビジャック組合という二つの沖縄漁民グループがカツオ鮮魚の販売とかつお節製造を行っていた（藤林・宮内 2004）。原の調査の一員であった人物が鹿児島出身の漁師と同年に日蘭漁業を発足させ、1931年には愛知県出身の大岩勇という人物が大岩漁業を設立し事実上全ミナハサ（北スラウェシ半島）のカツオ市場を支配すると評されるまでに至った（藤林・宮内 2004）。大岩は出身地によって選別をせず、同郷の愛知県人も焼津の職人も沖縄漁民も雇用したし、オランダ政庁の規制をのがれるため地元民の雇用も行い、1939年の従業員数481名のうち日本人が128名、353名が地元住民であった（藤林・宮内 同上）。「戦前の一時期、大岩漁業の従業員として、また大岩漁業にカツオを納入する漁民として、ビトゥンには数百人の日本人が暮らしていたが、実はその多くが沖縄出身者であった」、「大洗町で暮らす日系インドネシア人の祖父の出身地を尋ねると伊平屋村、伊是名村（ともに島尻郡）、読谷村（中頭郡）など沖縄の地名がつぎつぎとあがってくる」（藤林・宮内 同上）ということである。筆者のインタビューでは沖縄出身の祖父を持つものは一人だけだったが、全体としては沖縄出身者の子孫が多いのである。

戦後は北部スラウェシ州における日本人によるカツオ産業は衰退するが、1970年から1990年にかけて大岩漁業にゆかりのある人々を中心に再びかつお節製造業が試みられるようになるが、原料の鮮度が悪いことや製造工程の不備で品質が劣るかつお節しか作れず、早々に撤退することが続いた（藤林・宮内 同上）。

筆者によるインタビューにも登場するサリ・チャカラン（Sari Cakalang）<sup>3)</sup>社は、華人で大岩工業で働いた父を持つ人物が経営者で、従来冷凍カツオの輸出をしていたが1985年にかつお節製造を開始し、以後かつお節生産量において第一の座にある（藤林・宮内 同上）。1994年には長野県出身の坂口節夫氏によりマナド・ミナ社が創業され、日本国内の工場内の設備を備え厳しい品質管理を実施することで日本製に劣らない品質を実現した（藤林・宮内 同上）。

本稿でインタビューに応じてくれた日系インドネシア人は、上記のかつお漁やかつお節に関係した歴史のなかに位置づけられる人々である。

ジャワ島やスマトラ島においては、ジャワ組・スマトラ組という戦友間のつながりがあり、1979年に全体を網羅した相互扶助組織、Yayasan Warga Persahabatan「財団法人福祉友の会」が設立された（坂井 2009）。しかし、北部スラウェシの残留者のうちそのような互助組織に参加したものは少なく、第二次世界大戦、独立戦争、その後の散発的な内戦によってそもそも出生証明書や婚姻証明書が作成されないこともあったし、焼けてしまうなど保管ができていないことが多かった。従って北部スラウェシにおいては、日本軍人の子孫であるにも関わらずその認定がなされなかったものが存在する。これに対し、カツオ漁やかつお節生産に関わった民間人については日系人であるとの認定がされやすかった。これは、滞在期間が数年から二十年におよぶ長期滞在者が多く、周囲のインドネシア人に自分の詳細を語りそれを覚えている者が多かったことや、戦中の混乱期前に婚姻していて証明書などが発行されていたことが多いことによる（金他 2016）。

本稿のインタビューにおいては、軍属として徴用された人の子孫はいたが、軍人の子孫はいなかった。

#### 4. 大洗のインドネシア人コミュニティと教会

北部スラウェシ州は、スラウェシ本当の北部スラウェシ半島部分（別名ミナハサ半島）と、北に広がりフィリピンへとつながるサギル<sup>4)</sup>諸島、タラウド諸島などの島嶼部から成る。大洗で居住している日系インドネシア人は多くが北部スラウェシ半島（ミナハサ半島）から来ている。目黒 2009によると2005年の1年間に任意40人を対象としてアンケート調査および聞き取り調査を行った結果では2名を除いて全員ミナハサ出身者であった。そのほとんどがマナド、ビトゥン、トモホンから来ている。残り2名のうち1名がサギル諸島、1名がカリマンタン東部のバリクパパン出身者であった。

大洗町には、資格外就労者および日系人の出身地域ごとの同郷会が10組織存在していたが、徐々に月一度の食事会以外では機能なくなり、代わりに教会組織や就労先の企業で築かれる社会関係が強化されていった（目黒 同上）。

これまではカトリックの教会が一つ、プロテスタント教会は四つあったが、2018年後半にそのうちの一つ、Greja Masehi Injil Minahasa（ミナハサ福音キリスト教会）から Greja Masehi Injil Jepang（日本福音キリスト教会）が分裂した。一般的に教会の分裂には出身地の違いや、日系インドネシア人・不法就労者・研修生などの滞在資格による人間関係の軋轢など様々な要素が関係するのだが、この分裂については前者がミナハサ（北部スラウェシ）の教会の系列にあり、牧師も本国で決められてそれを迎える形になっていることに違和感を覚えた人々が、自律的な教会組織を目指したことが強い要因となっている。Greja Masehi Injil Jepangには、本国の組織からの独立を指向する日系インドネシア人に加え、「ミナハサ」が冠された教会には違和感を覚える島嶼部の出身者が参入することになった。

ただし、奥島 2009にもあるように、複数の教会に通うものもおり、コミュニティの中に深刻な断絶があるということではない。第7節の聞き取り調査にもあるように、きょうだいの中でそれぞれ通う教会が異なることもある。

以下の5節にあるように、大洗の在日インドネシア人の中には日本語の習得がなかなか進まない人が多い（助川・吹原 2009）。一方、インドネシア人を主体的に支援する機関はまだ存在しない（奥島 2009）。このような状況において教会の果たす役割は、多岐にわたる。宗教の祭礼やイベントの他に、互助組織として買い物や通院や在留資格に関する書類提出など様々な生活上の支援を行っている。

また、日本の教会との連携もあり、Greja Masehi Injil Minahasa（ミナハサ福音キリスト教会）は日本のプロテスタント教会である水戸中央キリスト教会との合同祭礼を年に二回行っている。

#### 5. 大洗在住インドネシア人の日本語習得状況

本に在住する外国人についてはコミュニティ・国籍・個人の置かれた状況によって日本語習得状況に大きな差がある。2005年から17回に渡り大洗町での調査を行った結果をまとめた助川・吹原2009では、口頭能力に関して、53名中48名が「日本語能力が皆無か挨拶程度しかできない能力、あるいは1語文や挨拶などの定型表現でかろうじて会話が続けられる能力」、5名が「2語文以上の文構造を用いて会話を維持できる能力」と判定しており、日本語習得状況はかんばしくない。来日してからの期間が長くなるにつれて習得語数が多くなる傾向は見られるものの、5年以上滞在していても1語文が中心であり、「ついたり」や「はつか」のような基本語が抜け落ちているものもある(助川・吹原 同上)。職場では単純作業が主であり、水産加工工場にも、雇用者側が魚の名前や手順をローマ字で示したりと配慮があり、日本語能力が低くても十分な作業能力を発揮できる(助川・吹原 同上)。

この調査結果は、筆者の観察とも一致する。第4節に示したように教会を中心としたコミュニティが機能しており、日本語能力が比較的高いものに、病院や雇用者側との交渉などの場面で頼ることができる。大洗町は公共交通が不十分なので、自動車がないと大変不便だが、この点においても助け合いが存在する。

6節と7節にまとめた聞き取り調査に応じてくれたのは、このような環境で暮らしている人々である。

## 6. 大洗在住のインドネシア技能実習生の聞き取り調査

本節と以下の7節に記す聞き取り調査は2018年12月22日と23日に行った。この両日はクリスマス時期の土曜日と日曜日に当たることもあり、22日はGreja Masehi Injil Jepangのクリスマス祭礼とその後の日曜学校に通う子ども達のクリスマス会、23日は水戸中央キリスト教会との合同祭礼の後、聞き取り調査を行い、夜に行われたカトリック教会の祭礼の後にも調査を行った。

インタビューはインドネシア語マナド方言を話す調査協力者Hendrik Paat氏<sup>5)</sup>がマナド方言で質問するようにして、基本的にマナド方言での回答を得た。話題と時系列にそってまとめ直すなどの編集は行ったが、なるべく実際の一問一答に忠実な形で日本語に訳したものを記している。以下の記述で「質問者」とあるのは、Hendrik Paat氏もしくは筆者自身の発言である。聞き取り調査に応じてくれた方はイニシャルで記している。

### 6.1 技能実習生のN.M.さんの話

N.M.さんは20代前半の男性で、技能実習生として来日して二年が経つ。技能実習生としての訓練期間と日本での仕事の様子について尋ねた。

質問者：日本の印象はどのようなものですか。

N.M.：日本に来た当初は環境がととても違うので、緊張しました。日本人は挨拶をきちんとする礼儀正しい人たちだと思います。

質問者：一人で来日したんですか。来日前に、日本語を習ったりしたんですか。

N. M. : 友達二人と、全部で三人で日本に来ました。日本に来る前は、技能実習生として、インドネシアで研修を受けました。Lembaga Pendidikan Keterampilan (職業教育機関) で6か月、来日前に研修があったのです。最初の6か月くらいは自分の住んでいる Sangir 島で2012年に設立されたLPKでの研修でした。一週間に3回、一回1時間から2時間くらい、日本語と日本文化の学習をしました。

質問者：技能実習生はどのように募集されるんですか。

その場にいた J. G. さん：日本政府と、インドネシアの高等教育部、民間会社の三者協力ですね。大洗では協同組合が受け入れます。日本政府が外務省を通してインドネシア政府に依頼し、高等教育部で技能実習生を受け入れます。インドネシアの労働省から許可が出ます。

質問者：日本語の学習はいつやるの？ 研修中は何か学校に通っていたり仕事をしていたりしたの？

N. M. : そのころは委託で役所の運転手をしていました。大体、午前9時から午後5時くらい、一日9時間くらいの勤務で、その後は自分の都合がつくときは少し余分に働いたりしていました。日本語の勉強がある日は、午後5時から7時の間の時間帯で、先生の都合によって変わります。仕事を終えてから駆けつけていました。この運転手の仕事は一年くらい続けたかな。

質問者：水産加工工場などでの実習はあったんですか。

N. M. : それは日本語の研修が終わったあと。1か月くらい、ビトゥンのかつお節工場や缶詰工場で実習しました。かつお節はインドネシアでは ikan kayu<sup>6)</sup> と言っていました。Sari Cakalang と Sari Muara Rugis という会社で研修しました。魚をさばいたりきれいに洗ったりする実習の他、理論的なことも勉強しました。

質問者：研修中は給料が出るの？

N. M. : 給料はありません。サギル島での日本語の研修は無料でした。ビトゥンでの実習中も給料は出ないけれど、その代わり寮に無料で住むことができ、そこから工場に通う交通費と、ご飯代だけが出ました。あまり自分のお金を持ち出す必要はなかったですね。

質問者：ビトゥンのことについて、もう少し聞かせて下さい。

N. M. : 水産工場がいろいろあります。一家でやっているようなごく小規模なところではかつお節製造のために魚をさばいたり整形したりしています。小さい工場では魚を冷凍してまたよそへ売するような作業をしています。大規模な工場では魚を缶詰などに加工しています。

質問者：ビトゥンでの実習は日本での仕事と似ていますか。実習が今の仕事に役立っていますか。

N. M. : ああ、ビトゥンでの実習と日本で今やってる仕事は全然内容が違いますよ！ ビトゥンではかつお節や缶詰を作っていたけど、日本ではT水産で干物を作っています。僕は

丸干しの係で、内臓をとったりしないで、乾燥機に入れたり温度を調整したりしています。午前6時から午後2時、午後2時から午後10時、午後10時から午前6時の3交代制で働いています。日本ではみんな動きがはやくてキビキビしているし、規律がしっかりしています。時間も厳守。インドネシアではjam karet (ゴム時間)<sup>7)</sup>だから (笑)。そこもピトゥンとはずいぶん違いますね。

質問者：北部スラウェシの人は職場にいっぱいいますか。

N.M.：僕が働いている職場には、3人しかインドネシア人がいなくて、あとは皆日本人です。僕の他の2人もサギル島の出身の「ケンシュースーサー」<sup>8)</sup>だけれど、日本に来てから知り合いました。

質問者：日本での仕事で、嫌なことと楽しいことについて聞かせてください。

N.M.：嫌なこと……うーん。寒いのが辛いですね。室内は暖房が効いていますが、外での仕事が多くて冬はとっても寒くて嫌です。暑いのは慣れてるから大丈夫だけど、寒いのは慣れません。防寒服は自分で用意しなければなりません。

楽しいことは……給料日かな。毎月10万から13万くらい手元に残ります。食費とか住居費とか全部引いて、そのくらい残ります。

質問者：生活に必要な経費はどんなものでしょうか。インドネシアには毎月どのくらい送金するの？

N.M.：5万円のアパートに3人で住んでいます。光熱費なんかも入れてこの値段。2DKかな。食費は自炊しているので2万円くらいです。

送金は、毎月決まった額を送るのではなくて、要請があったら、その額を送ります。送金はATMで簡単に送れます。

質問者：今までに一時帰国は何回しましたか。来年から研修生の期間が伸びそうだけど、延長したいですか。

N.M.：日本に来てから二年、まだ一度も帰国していません。3年の予定で来ているし、制度のことはよく分からないのでその先のことはわかりません。

質問者：日本人と結婚して移住したりはしない？

N.M.：ええっ (笑)。今恋人はいないから、日本人のjodoh (運命の相手)に出会ったら、分からないけど…… (笑)。

## 6.2 まとめ

N.M.さんの他にも何人かの技能実習生に話を聞いたことがあるが、主な点は上記の聞き取り調査と一致している。生活費を除いても十分な額が手元に残る。来日前の研修費代や渡航費として30万くらいの経費がかかっているはずだが、それらの経費をどう支払っているのかについてはよく分からないようで、はっきりした回答は得られなかった。大洗町に関し

ては、受け入れ機関と送り出し機関がきちんと機能している印象が強く、技能実習生が搾取されているようには見えない。彼らは仕事はつらいことがあるけれど、それに見合う収入を得られていると感じている。彼らは元々2年あるいは3年でインドネシアに帰国するつもりで来日していて、ほとんど20代の若者である。技能実習生が搾取に耐えかねて逃げ出したり、さらに長期間日本で働くために逃亡したりという話もよくあるが、現在の大洗町に関しては受け入れ機関が管理を徹底しており、実習期間終了後、確実に全員を帰国させているという。

外国籍の人々の不法就労の取り締まりが厳しかった1990年代に、大洗町の水産加工工場も摘発を受け、不法就労者の雇用をしなくなった(目黒 2009)。今回の聞き取り調査でも、水産加工工場には技能実習生か日系インドネシア人およびその家族しかいないということを何人もから聞いた。

不法就労者に関しては、録音をしない状態で第7節で回答してくれた日系インドネシア人たちに尋ねた。正式な送り出し機関ではないブローカーが暗躍しており、「旅行者ビザで入国して、すぐに仕事を見つけて働くことができる」などと言って手数料を取り、日本にいたらそのまま人々を置き去りにするのだという。行き場がなく困って、大洗町のインドネシア教会を頼って訪れる人々もいる。1泊や2泊の宿を提供するくらいなら助けられるが、ずっと居候をされても支えるだけのスペースも財力もないため、助けてあげたいが出て行ってもらうことになる。工場では不法就労者は働けないため、農家に散って働き場所を探す。賃金は工場労働よりも低い。これらの悪質ブローカーの犠牲者は自力で何とかするしかないのだ。それに比べると、正式なルートで技能実習生として来日した人々の全般的な満足度は高いはずである。

## 7. 大洗在住の日系インドネシア人とその家族の聞き取り調査

本節では、日系インドネシア人とその家族としてのビザで日本に滞在している人々から日本人の祖父たちと日系人としての認定を受け日本に来た経緯について聞いた結果をまとめる。

### 7.1 J.G. さんの話

J.G.さんは来日して14年ほどで、妻が日系人であるのでその家族として長期滞在ビザを持っている。

質問者：まず、日本人の祖先について聞かせてください。

J.G.：私の妻の祖父が日本人です。名前はY.K.といます。沖縄、渡嘉敷の出身の漁師でした。そもそもYの父親が漁師で、その父親についてビトゥンの近く、ケマ海岸で漁をしていました。戦時中には徴兵されて、戦争に巻き込まれていきました。

漁師であったときに、妻の祖母にあたるミナハサ人と結婚して長男と長女が誕生しました。その長女が妻の母にあたります。

J.G.: 妻の母の兄にあたる A 伯父が、自分の父親のことをよく覚えていて、仕事や旅行でくる日本人を探しては父親のことを知るすべはないかと尋ねていたんです。あるとき旅行者の日本人があるホテルに泊まっていることを聞きつけ、訪ねて助力を得ました。通訳をしているような人に祖父の事情を書いた手紙を日本語に訳してもらったりしているうちに、大洗で社長をしていた S 氏につながりました。日本人の Y.K. の写真もあったし、結婚の証明書なども残っていたんです。

S 氏が奔走してくれました。妻の祖母のきょうだいや近所の祖母と同世代の人々から Y との結婚の実態について聞き取り調査をまとめたりして、証明できるようにしてくれました。

質問者：沖縄の親族にはお会いになった？

J.G.: 妻の長兄の H が最初に日本に来たとき、2000 年ごろに、沖縄にも行っています。そこで Y.K. の親族に会いました。なんと、Y の母親が生きていたんです。2000 年ごろに 104 歳でした。H に Y の面影があったようで、「ああ、Y の子なのね」と感慨深げだったそうです。親族には歓迎されたと聞いています。

娘が沖縄に修学旅行に行ったんですが、親族には会っていません。妻と私も沖縄に行ってみたいんですが、まだ行ったことはないですね。

質問者：J さんはどのようにして日本に来ましたか。

J.G.: 妻の祖父にあたる Y.K. の孫は、6 人います。妻のきょうだいと A 伯父のこどもたち（妻にとってはイトコ）を合わせて 6 人です。そのうち 1 人はミナハサ在住ですが、あとの 5 人はみんな日本に住んでいます。妻と私はその 5 人の中で一番最後に 2003 年に来ました。大洗にはもうすでにミナハサ人が多くいたし、社長の S 氏の紹介もあったので、仕事先も見つかったから来ました。妻の兄弟・イトコの中にはカトリック教会に通っているのもいるし、私と同じ教会の人もいます。

## 7.2 日系人の M.P. さんの話

M.P. さんは日本人の祖父を持つ 40 歳くらいの 3 世で、来日して 18 年になる。子供二人は日本の小学校と中学校に通っている。妻は北部スラウェシの人で、インドネシアに一時帰国しているときに人の紹介で知り合い、結婚して妻も日本に来ることになった。M.P. さんの日本人の祖父と日本に来た経緯について聞いた。

質問者：M.P. さんのお祖父さんについて聞かせてください。

M.P.: 僕のお祖父さんは、福岡出身の日本人です。日本占領時代の役人でした（インドネシア語では Kepala Daerah Bupati Pemerintah と回答）。サギル人の祖母と結婚して、子どもが一人生まれた時点で日本に帰国し、その後二度とインドネシアに来ることはありませんでした。祖母はもう一人、お腹に子どもがいました。祖母は二人の子どもをかかえ、インドネシア人の軍人と再婚しました。

僕の父親はずっと自分の父親のことを探していて、たまたまサギルに来た日本人に尋ねることを繰り返し、日本語に手紙を訳してもらって出した結果、祖父にたどり着きました。そ

の時点で祖父はまだ生きていたんです。

実は、祖父はインドネシアに来る前に日本で結婚していて、子どももいたんですよ。その後でサギル人の祖母と結婚し二人の子どもをもうけ、日本に帰国してからは以前の妻とまた結婚生活を送り、さらに子どもをもうけました。

質問者：サギル人のお祖母さんは、祖父の日本人妻について知っていたんですか。

M.P.：いや、まったく知らなかったです。

質問者：ひどい男ですね。

M.P.：ははは。そういうわけなんで、僕の母と伯父は、その上にも下にも日本人のきょうだいがいるんです。

質問者：日系人の認定を受けた経緯をお聞かせください。

M.P.：祖父の写真も結婚証明書ものこっていて、当時の生活をよく知る人もいたので、証言を聞き取るなどしてもらいました。S氏が尽力してくださいました。祖父の住んでいたところの近くに日本語とインドネシア語ができる博士が住んでいて、翻訳など助けてくれました。

僕の父は福岡に3回も行って、祖父の墓参りもしています。父の異母姉にあたる、日本人妻の最初の子どもの会っています。この人は僕にとっては伯母さんにあたりますが、1988年にサギルにも来てくれたんです。いろいろと助けてくれて、僕が日本に来るときの保証人にもなってくれました。手紙を送れば返事をくれるなど、関係は良好でしたが、この伯母も今は年を取って老人ホームにいます。僕も3回福岡に行って、お墓参りもして、福岡ドームにも行きました。

### 7.3 日系人の配偶者を持つZ.P.さんの話

Z.P.さんは来日して二年、日系人の奥さんの家族ビザで滞在し、子供二人も茨城県に住んでいる。妻の日本人の祖父と来日の経緯について聞いた。

質問者：まず、奥さんのお祖父さんについて聞かせてください。

Z.P.：妻の祖父は、軍人ではなく、H.A.という埼玉出身の民間人でした。戦争のときは軍需物資、特に食料を調達する係だったそうです。通訳としても働いていたそうです。サギル人女性と結婚して二人の子どもがいました。(7.2節で記した)M.P.のお祖父さんもそうですが、サギルの役所に当時サギル人と結婚した日本人の記録に書いてありました。全部で4人の日本人がサギル人の妻をめとったと記録にあります。

祖父は子ども二人に日本名をつけました。日本に帰ってからは音信不通でした。妻の祖母は再婚せず、子供二人を育てました。

質問者：日系としての認定と、日本に来た経緯をお聞かせください。

95  
(26) Z.P.：2000年までは日本の家族とは一切連絡がありませんでした。(7.2節に登場の)M.

---

P.が助けてくれ、S氏が尽力してくれて、何とか埼玉の親族と連絡がとれたんですが、当初、先方が警戒していて関係はよくありませんでした。インドネシア側の子孫から責任を取れと言われるのを恐れていたようです。その後、責任を取ってもらいたいのではない、日系の認定を受けただけなのだと理解してもらいました。

妻の祖父はサギル人との結婚が初婚で、日本に帰国後、日本人と再婚して子どもをもうけました。2016年に初めて妻の祖父の居所が分かったので、僕と妻の二人で埼玉に行きました。祖父は98歳で存命でしたが、退院したばかりで体が弱っていたので祖父とは会えませんでした。かわりに妻の父の異母妹に会いました。

日系の認定にあたっては、S氏の他、弁護士にも書類作成を依頼しました。水戸中央協会の山本牧師にも助けてもらっています。結局、妻の父の異母弟妹が証明するのを助けてくれました。東北に住んでいる人が協力的だったのですが、遠いのでS氏に聞き取り調査にってもらいました。2017年に妻の祖父は亡くなり、とうとう生きている間に会うことはできませんでした。

サギル諸島は、インドネシアの北の端です。スラウェシ島からもずいぶん離れています<sup>9)</sup>。妻の父が一生懸命、自分の日本人の父を探していた1980年ごろは船の便が週に一便あるかないかで、交通がとても不便でした。だからなかなか日本人の父を探し出すことができませんでした。ましてや、妻の祖父がサギル人妻と結婚していた当時の1943年頃は、もっとインドネシア中央（首都）との距離は大きかったのです。サギルの役所に結婚証明が残っていたことが日系の認定につながりましたが、もっと早くに認定がされなかったのは、サギル島がインドネシアの中央から遠いことが原因です。

質問者：Z.P.さんの滞在ステータスとお仕事について聞かせてください。

Z.P.：妻が日系人の長期滞在ビザ、僕は日系人家族のビザで毎年更新しなければなりません。何度も更新していると一年ではなく三年とか五年とか、より長期間のビザがおりるようになります。今はY水産に勤めていて、主にししゃもを乾燥機に入れたりして加工をしています。アイスランドとかカナダから輸入したししゃもを解凍して加工するんです。そのほかにエビフライ、カキフライ、ワカサギとかの加工もしています。

質問者：給料は日本人と同じですか。

Z.P.：いや、日本人の方が多いと思います。僕は時給で働いているけど、日本人はみんな月給でもらっていますから。一週間に6日、一日8時間か9時間働きます。休みは日曜と祝日だけです。年末は12月29日から休みで、10日くらい休業となります。

質問者：日本語は来日前に勉強しましたか。

Z.P.：いえ、まったく勉強しませんでした。日本に来てからはじめて日本語を勉強しました。仕事も日本に来てから探したんです。

質問者：日本には家族全員で来たんですか。

Z.P.：いえ、最初は妻と二人だけで来ました。仕事を探して、二年たってようやく、今年の

10月に二人の子どもたちを呼び寄せたんです。それまで上の子はもう高校を卒業していたので一人で生活し専門学校に行っていました。下の子はまだ小さかったのでサギルにいる僕の両親が面倒を見ていました。最初は旅行者ビザで入国し、それから日系人の家族ビザを取得しました。

今、長男は19歳で、日立にあるS工場で働いています。一日5時間働き、4時間日本語の勉強をしています。長女は12歳で、日本の学校に通い始めました。

質問者：お子さんたちは日本での生活をどう感じていますか。

Z.P.：二人とも楽しんでますよ！ 長男は日本語を勉強して、これからも日本で働くつもりです。長男が働く工場ではマナドの人は他に一人しかなくてあとは全員日本人だから、会話も全部日本語でやらなければならないんです。日曜には長男が教会に来られるよう、日立まで車で迎えに行っています。

長女は、家族ビザがとれるまで旅行者として滞在していたので、小学校に通い始めたのがつい一週間前です。とても楽しいと言っています。小学校に通う前、役場で開催されている日本語の講座に通い、平仮名と片仮名を覚えました。小学校のクラスでは、文字が読めるので一般クラスにすぐに入れられました。

質問者：今後、どのくらい日本に滞在する計画ですか。老後はどうなさいます？

Z.P.：以前は子どもと離れて暮らしていたけれど、ようやく呼び寄せて家族全員が茨城県に住めるようになりましたから、今、とてもうれしいです。できるだけ長く日本での生活を続けていきたいですね。

僕はサギルをずいぶん前に離れてビトゥンで生活していて家もあります。今は親族が掃除などしてくれて家の面倒を見てもらっています。その家がありますから、老後は多分ビトゥンに帰るかもしれません。サギルに戻るかもしれませんね。

#### 7.4 T.さん一家の話

本節と以下の7.5節では公民館を夜間に借りて祭礼を行っていたカトリック教会の人々から話を聞いた。E.T.さんは日系三世で来日して17年くらいになる。その父親のL.T.さんは日系二世の妻と結婚している。お二人に話を聞いた。

質問者：日系の認定を受けられた経緯を教えてください。

L.T.：私の妻が日系です。妻の父親は広島出身でした。私の娘（日系三世にあたる）はインドネシア国立マナド大学の日本語学科だったんで、交換留学生として日本に来たんです。マナドから日本に向かう空港でS氏と偶然会いました。娘が「祖父は日本人です」というとS氏はびっくりしていたそうです。1999年の時点で妻の父親が生きていることを知らせてもらい、妻は2000年に父親に会いに行きました。

質問者：ご家族はいつ日本に住み始めたんですか。

L.T.：娘はマナド大学を卒業してから、日本に来ました。今は看護師として働いています。

妻もそのあたりで日本に来てS氏の紹介で大洗の工場で働き始めました。私はマナドで校長として働いていました。二人の息子も、一人は大学卒業後、もう一人は修了前に2001年ごろ大洗に来て働き始めました。S氏の紹介です。みんな日本で家族と住んでいます。私は日本に来るのはもう8回目くらい。もう年金生活者なので、いつでも来られます。日本で医者にかかっています。

質問者：大洗での仕事についてお聞かせください。

E. T.：僕が日本に来たのは、日本でどのくらい仕事ができるか、試してみたかったからです。大洗では職場を変えて、今は三社目です。私の妻は私が最初に働いていた職場で今働いています。

今はシヤモを主に取り扱っています。朝7時から夕方5時まで、月曜から土曜まで働いています。夜勤はありません。土曜は半日勤務のときもあります。日曜は休みです。

質問者：永住権はありますか。

E. T.：前は日系人の長期滞在ビザで働いていましたが、9年目で永住権をもらいました。

質問者：奥さんは日本人ですか。

E. T.：いいえ、ミナハサ人です。一時帰国のときに知り合って結婚し、妻も来日して大洗で働くようになりました。

質問者：インドネシアにはどのくらいの頻度で帰りますか。

E. T.：そうですね、2年か3年に一回ですか。毎年帰ることを決めているわけではなくて、冠婚葬祭などがあるときに帰っています。

質問者：日本語はどうやって勉強しましたか。

E. T.：日本に来る前に日本語を勉強したことはありません。来日してから覚えました。もう日常会話には問題なく、職場でも日本語を使っています。書類などの読み書きは無理なので、助けがいますが。最初の職場でも、古参のインドネシア人がいたので、その人に初日にインドネシア語で全部説明してもらって、あとは自然にできるようになりましたね。

質問者：日本での生活について、どう感じていますか。

E. T.：今の生活に満足ですよ。日本に家族が全員いますから。インドネシアでは働いたことがないから、比べることはできないけど、日本は規則がきちりして収入も十分あるから満足です。

子どもは三人いて、みんな日本の学校に通っています。一番上の子は四年生です。子育てを始めたころは困難もありました。最初は日本語ができないから妻は大変だったと思いますよ。学校で何かあっても、よく状況がつかめなくて。

外国籍の子どもたちへの日本語カリキュラムは2008年に始まりました。だから、うちの子どもたちはスムーズに慣れていきました。

質問者：お子さんの今後の教育はどちらの国で考えていますか。老後はどちらの国で過ごしますか。

E. T.：今のところ、子供たちの教育は日本だと考えています。高校でも大学でも、行けるところまで行かせたいです。大学の教育費は高いから、どうなるか分からないけど。子どもたちが日本にいるんだったら、老後もずっと日本にいるかもしれませんね。ミナハサに家はありますけれど。

## 7.5 J. M. さん夫婦の話

J. M. さんの祖父が日本人、母が日系2世である。J. M. さんは50代後半で、妻の M. L. さんとともに大洗で暮らしている。

質問者：日本人のお祖父さまはどのようにしてインドネシアにいらしたんですか。

J. M.：祖父は神戸出身で H. Y. といいます。戦前にインドネシアに来たようです。漁師で、水産会社の社員でもありました。ミナハサ人の妻と結婚して、全部で9人子どもがいました。

質問者：大戦後はどうなったんですか。

J. M.：第二次世界大戦で日本が負けたあと、祖父は祖母と、それまでに生まれていた8人の子どもを連れて日本に帰国して多摩に住みました。日本で9番目の子どもが生まれました。日本に帰った直後は食糧不足で、本当に大変だったそうです。芋ばかり食べていた、長い行列に並んでようやく食料を手に入れたと聞いています。

日本人の祖父とミナハサ人の母は何年かして離婚し、9人きょうだいのうち下の3人を連れてインドネシアに帰りました。うちの母は下から二番目で、12歳まで多摩に住んでいて、インドネシアに祖母と共に帰国しました。私の母は今、栃木県に住んでいます。当時通っていた多摩の小学校の場所など今でも覚えているし、6年生まで通ったから漢字の読み書きも結構できて日本語に不自由はありませんね。

上の子ども6人は祖父と共に日本に残りました。母の一番上の姉はアメリカ人と結婚してアメリカに住んでいるんですよ。

私の祖父はミナハサに来たことがありました。私が小さいころ、おんぶしてもらったことを覚えています。祖父は今、神戸に葬られていてお墓があります。墓参りにも行きました。

祖母は、再婚せず、3人の子どもを育て上げました。親族がいたこともあり、ココナツやバナナを栽培・販売して生活しました。

質問者：日本に来た経緯をお聞かせください。

J. M.：日系2世のおばたちが集まっているところに S 氏が来たのが最初です。マナド近くのブナケン島はダイビングリゾートで、日本人も結構来ていたので、その日本人から S 氏がおばたちのことを知ったようです。ウジュンパンダンの領事館<sup>10)</sup>に行きまして、私は日系の3年のビザ、妻は家族ビザで一年の滞在許可をもらいました。

私の弟妹が先に日本に来ていて働いていて、給料や仕事の環境が良いと聞いたので、日本に来ようと思いました。弟妹が先にきていたので日系ビザの申請などは簡単で二週間ですみ

ました。私のきょうだいは4人いて、一番上のきょうだいだけがミナハサにいます。私のすぐ下のきょうだいは栃木県小山、私と一番下のきょうだいが大洗に住んでいます。私の母は小山のきょうだいと一緒に住んでいます。

質問者：永住権は申請しないんですか。

J.M.：ええ、永住権は別にいりません。申請を繰り返して、滞在許可が出なくなったら、ころあいだからインドネシアに帰りますよ。もう60近いし、老後はミナハサで過ごすつもりです。親族もたくさんいますからね。

質問者：日本での生活についてお聞かせください。

J.M.：最初、日本に来た時は鈴鹿で働いていたんですよ。そこでは日系がいっぱい働いていました。フィリピンの日系人やペルーの日系人がいましたよ。滋賀、岐阜、栃木県小山市でも働きました。仕事があればどこでも働きます。大洗は教会があってミナハサ人のコミュニティがあるからいいです。滋賀や岐阜にはインドネシア人の教会などなかったですからね。知らない言葉で祭礼をされても、ちょっとね。

娘は私の3番目の子どもで、2009年に日本に来ました。高校を卒業してからマナドのある店で働いていてね、その仕事を辞めたいと泣きつくんで、日本に来させて一緒に大洗で働くようになりました。4世にあたりますが、当時19歳だったのでビザはとりやすかったですよ。

上の二人の子どもはインドネシアにいて、軍人と公務員をやっています。

## 7.6 日系インドネシア人の聞き取り調査のまとめ

今回の聞き取り調査の結果は、先行文献の内容と一致している。学歴については、目黒2005などで指摘されているように高卒か大卒であり、親族を見ても教員、公務員、軍人になっている人がいる中産階級の出身者が主である。北部スラウェシ州においては、漁民や水産会社の職員の子孫が多く、軍人として来た人の子孫は少ない。水産関係の日本人は1920年代から数多くインドネシアに来ていて滞在期間も長かったのに対し、軍関係の人々は数年間しか滞在していなからである。残留兵として北部スラウェシ州に残り、対オランダの独立戦争に参加した人々もいたのであるが、今回はそれらの人々の子孫にはインタビューできなかった。

日系としての認定を得るにあたっては系譜調査や親族からの聞き取り調査などが必要であり、戦争の混乱期のみ滞在了した日本人に関してはそれらが不足しているために認定が受けられないこともある。今回の調査でも、J.G.さんらによると、Hという日本人の子孫が近所におり、子ども全員が日本名を持っていた。近所の人々は彼らが日系人であることを証言できるのであるが、独立戦争後も内戦が各所であったせいで書類や写真が焼けてしまい、認定に至らなかったということである。戦前にインドネシアに来た日本人の子孫が目立つのは、混乱が少なかった時代の記録の方が残る確率が高いからである。

6節で挙げた研修生と異なり、本節で取り上げた日系インドネシア人の場合は、長期滞在を申請し続ければ永住権を得られる可能性が高く、能動的に自分の居住地を決めることがで

きる。今回の聞き取り調査の中でも、長期にわたって賃貸住宅に住むよりも安上がりだという理由で茨城県に家建てた日系インドネシア人の話が出てきた。

30代から40代のM.P.さん(7.2節)やZ.P.(7.3節)さん、E.T.(7.4節)さんのように、子どもたちが日本で通学していたり仕事を得たりして順調に拠点を築けている場合は、老後をどちらの国で過ごすか分からないと回答する。その一方、日系2世の妻を持つL.T.さんや3世のJ.M.さんのように60歳前後の人たちは老後をインドネシアで過ごす予定にしている人が多い。30代から40代の日系インドネシア人が(永住権を獲得して)老後も日本で過ごすかどうかは4世の10代の子どもたちが日本社会にどのように居場所を獲得していくかにかかっているのかもしれない。子どもたちが高校を出てからどうするか。日本で就職するのか、インドネシアに帰って(日本語力を活かして)就職するのか。日本の大学に進学するには資金的に難しいとしてインドネシアの大学に進学する可能性もある。実際、高校進学の際にインドネシアに帰国したり、高校卒業後にマナドで職を得たりする4世の子どもたちもおり、そのうちの一家族は3世の親世代も十数年の大洗滞在の後、インドネシアに帰国した。

日系インドネシア人は、ほとんどの場合、教会関係と職場関係を除くと日本人との接触がない(目黒2005、金他2016)。子どもを通じた日本人の知り合いが増えていけば、日本定住への可能性が高くなるかもしれない。

## 8. まとめ

インドネシアと日本の関係は明治期に始まっている。そこにはかつお節の需要が高まったことにより進出していった日本人の姿があった。1942年からの日本軍進駐後にも留まった日本兵の子孫もいるが、茨城県大洗町に来ている日系インドネシア人の祖父たちはかつお節やその他水産関係の人々が多かった。

北部スラウェシ州(ミナハサ、サギル諸島他)の人々が大洗町に居住して働き始めた経緯には偶然も関与していた。また、これだけ多くの日系インドネシア人が居住していることには、認定に尽力した個人の貢献が大きい。

技能実習制度には批判も多くあるが、悪質なブローカーや、送り出し国による搾取体系がない場合には、うまく機能することもある。大洗の水産加工会社で働いているインドネシア人技能実習生に関しては収入に関しての満足度も高く、教会を中心としたコミュニティの存在もあるので孤独感も感じずにすんでいる。

日系インドネシア人に関しては、彼らの存在が大きくなるにつれ、彼らが教会に行く日曜日に休業する工場が増えたという話も聞いた。

今回の調査に応じてくれた人は、クリスマスから年末にかけて帰国をしない人たちであった。SNSが発達しており、国際通話も様々な安いサービスがあるので、母国の親戚や友達との連絡が十数年前とは比べものにならないくらい容易になった。7.4節のE.T.さんの話にあるように、毎年決まった時期に帰るのではなく、冠婚葬祭などの機会があったときに不定期に帰るという人が増えているようだ。

今回聞き取り調査人々には日本人との結婚をした人はいなかった。十数年日本にいたとし

ても、結婚相手はインドネシア人であることが普通である。5節に挙げたような日本語の習熟度の低さも関係しているが、大洗でのインドネシア人コミュニティがしっかりしていることや、母国とのつながりが強いことから、そのような選択になるのであろう。

大洗町のインドネシア人コミュニティの今後は、日系4世の子どもたちの居住地選択によって変わるだろう。技能実習生に関しては、今後の政策によっては増加することも考えられるが、日系インドネシア人に関しては既に新たに認定を受ける人たちは激減しており、時が経つにつれ認定できるケースは少なくなる。もし日系4世の子どもたちが日本に定住し、かつ日本人との通婚も見られるようになると完全に日本社会に溶け込むことになるだろう。ただし、4世の子どもたちが一定期間の後、インドネシアに帰国するようなことになれば、老後を迎えた3世の人々はインドネシアに帰国する可能性が高い。大洗町のコミュニティも短期滞在者を主としたものとして存続することになるだろう。

### 参考文献

- 井口泰（2001）『外国人労働者新時代』、筑摩書房。
- 上坂冬子（1997）『南の祖国に生きて—インドネシア残留日本兵とその子どもたち』、文藝春秋。
- 奥島美夏（2009）「宗教・宗派を超える相互扶助の試み—日本におけるインドネシア人教会の展開と可能性」、奥島美夏編著『日本のインドネシア人社会—国際移動と共生の課題』、明石書店、249-268頁。
- 奥島美夏編著『日本のインドネシア人社会—国際移動と共生の課題』、明石書店。
- 金延景・栗林慶・川口志のぶ・包慧穎・池田真利子・山下清海（2016）「茨城県大洗町における日系インドネシア人の定住化要因—水産加工業における外国人労働者の受け入れ変遷の分析を中心に—」『地域研究年報』38号、31-59頁。
- 坂井隆（2009）「日系インドネシア人の就労と日系人社会の形成—長野県上田地方スマトラ北部出身者の事例から」、奥島美夏編著『日本のインドネシア人社会—国際移動と共生の課題』、明石書店、173-192頁。
- 助川泰彦、吹原豊（2009）「インドネシア労働者の日本語自然習得—茨城県大洗町の事例から」、奥島美夏編著『日本のインドネシア人社会—国際移動と共生の課題』、明石書店、157-172頁。
- 目黒潮（2005）「茨城県大洗町における日系インドネシア人の集住化と就労構造」『異文化コミュニケーション研究』17号、49-78頁。
- 目黒潮（2009）「日系インドネシア人の集住化と就労ネットワーク—茨城県大洗町のミナハサ族コミュニティ」、奥島美夏編著『日本のインドネシア人社会—国際移動と共生の課題』、明石書店、137-156頁。
- 林英一（2007）『残留日本兵の真実—インドネシア独立戦争を戦った男たちの記録』、作品社。
- 藤林泰・宮内泰介編（2014）『カツオとかつお節の同時代史』、コモンズ。
- 公益財団法人 国際研修協力機構ホームページ <https://www.jitco.or.jp/>（最終閲覧日 2019年1月10日）

註

- 1) 本稿の調査にあたってはインドネシア国立マナド大学の元教授、Hendrik Paat 氏の助力を得た。ここに感謝の念を示したい。また、JSPS 科研費 JP15K02531 の助成を受けて行われた。
- 2) 北スラウェシ州の人々は Manado と表記し、マナドと発音するが、インドネシア語においては Menado の表記も散見され、他地域の人が [mənado] (ムナドあるいはメナド) と発音することがある。インドネシアには約 700 の言語が存在し、国家語たるインドネシア語の地域方言も多様性に富むことから、しばしば地名の現地での発音と首都ジャカルタをはじめとする他地域での発音が異なることがある。
- 3) Sari Cakalang の Sari は味・香り、Cakalang はカツオのことであり、Sari Cakalang は「カツオの味」といったような意味。インドネシアでは Sari~ という製品名がよく見られる。
- 4) サギルはインドネシア語では Sangir という綴りで表わされ、[sanjir] という発音だが、日本語の文献ではサンギルと書かれることもある。また、サギルに住んでいる人たちが話すサギル語においては [sanjihe] (サギヘ) と発音され、Sangihe と書かれた地図もある。サンギル、サギル、サギヘは同一の土地を指している。
- 5) トモホン市近郊の出身で、元インドネシア国立マナド大学教授。
- 6) ikan は魚、kayu は木で、全体で「木(のように固い)魚」という意味。
- 7) 早まったり遅れたり(大抵後者)するということ。インドネシアでよく使われる表現。
- 8) 2節にあるように、給料が発生している実態から実際には技能実習生だと思われる。
- 9) 現在、スラウェシ島のマナドから頻繁に船の便があるが、一晩かかる。
- 10) Ujung Pandang は 1971 年から 1999 年まで使用された地名で、現在は 1971 年前に使われていた Makassar (マカッサル) という地名に戻っている。